

## 体言化理論における文法関係と概念表示： インド・アリア諸語の用言基盤体言化から\*

吉田樹生<sup>1</sup>、石川さくら<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東京大学大学院、<sup>2</sup> 東京外国語大学大学院

shige.mountain.linguistics@gmail.com, sakura.ishikawa.di2@gmail.com

**要旨:** 本研究では体言化理論 (Shibatani 2019) の観点から、特に文法関係や意味役割に着目して、インド・アリア諸語 (NIA) の用言基盤項体言化を分析する。用言基盤項体言化には、従来「主要部なし関係節」および「主要部外在型関係節」とされてきたものが含まれ、体言化理論においてはそれぞれ名詞句用法および修飾用法として、同じ体言化構造の二つの用法と分析される。本稿はシンハラ語・ネパール語・ヒンディー・ウルドゥー語・ベンガル語の体言化を調査して、(i) 従来非文とされてきた体言化にも談話的文脈を想定すれば容認されるものがあること、(ii) NIA の体言化はすべて名詞句用法と修飾用法に使えること、(iii) アスペクトにより体言化の表す意味役割が異なる言語があること、を示す。これらに基づき、(iv) 先行研究では屢々文法性と容認性が混同されてきたこと、(v) NIA の体言化に対してアスペクトごとに意味役割に基づく含意的階層を設定することができること、さらに (vi) この含意的階層は従来提案されてきた階層では捉えられないが、体言化の基盤にメトニミーを据える体言化理論によって説明できること、を主張する。

**キーワード:** インド・アリア語派、機能主義類型論、体言化理論、関係節、文法関係、メトニミー

### 1. はじめに

- **概要:** 本発表は体言化理論 (Shibatani 2019) の観点から、インド・ヨーロッパ語族インド・アリア語派 (NIA) に属するシンハラ語・ネパール語・ヒンディー・ウルドゥー語・ベンガル語の用言基盤項体言化を調査・分析する
- **体言化理論:** Shibatani (2019) の体言化理論では、従来関係節と呼ばれてきたものが動詞 (用言) を基盤とする体言化構造の一つの用法として捉え直されている
  - 体言化は、構造からメトニミーで喚起されるモノ・コト的概念の集合を概念表示するものとして機能的に定義される
    - 特に用言をインプットとし、モノ的概念を表すものを用言基盤項体言化と呼ぶ
  - 体言化は単独で指示をする名詞句用法と、別の名詞の表すものを制限する修飾用法を持つ
    - 例えば、[whom you love] という体言化は単独で名詞句になることもできれば、a man [whom you love] のように別の名詞を修飾することもできる
    - 修飾用法は従来の「主要部外在型関係節」、名詞句用法は「主要部なし関係節」に相当
  - 体言化の概念表示は文脈から独立して存在するが、具体的なものを指す際の指示は具体的コンテキストを必要とするとされている (パルデシ & 柴谷 2020: 422)
- **先行研究:** NIA は関係節の類型論や体言化理論にとって重要なデータを提供する
  - NIA の関係節は名詞句接近可能性階層 (Keenan & Comrie 1977) の反例となることが指摘されている (Subbārāo 2012; Shibatani 2021)

---

\*本稿に関する内容については以下の方々から有益なコメントをいただいた：河内一博、桐生和幸、柴谷方良、鈴木唯、長屋尚典、林真衣、ブラシャント・パルデシ、菱山湧人、日高晋介、Niranjan Upoor (敬称略)。本稿の地図データは OpenStreetMap (<https://www.openstreetmap.org>) の協力者に著作権があり、Open Database License に基づいて提供されている。本研究は、東京大学ヒューマニティーズセンター公募研究 (A) 「体言化の言語類型論：性、数、類別詞および定性を中心に」および国立国語研究所共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」(サブプロジェクト「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」) の研究成果の一部である。

- 従来、関係節化できる文法関係に「SUBJ > DO > IO > OBL > GEN > COMP」という名詞句接近可能性階層が提案されていた (Keenan & Comrie 1977)
- しかしベンガル語などの分詞では IO は関係節化できない一方、DO, OBL は可能であるとされる
- ネパール語体言化では、名詞句用法と修飾用法で表される文法関係が異なることが観察される
  - 名詞句用法では主語のみだが、修飾用法では制限がない (Wallace 1985; Paudyal 2010)
  - 名詞句用法を持たず修飾用法のみを持つ体言化は、体言化理論の論文で報告されていない
- **問題:** 体言化理論の観点から NIA の先行研究の分析をみると、以下の問題が浮かびあがる:
  - 記述的問題 1: NIA において関係節化 (体言化修飾用法) が可能でないとして置かれている文法関係は、統語論的に非文法的なのか? それとも語用論的に不適切であるのか?
    - 統語論的に非文法的 = 概念表示を持たず、体言化が成立しない
    - 語用論的に不適切 = 適切な具体的談話コンテクストが与えられないため容認度が低い
    - 容認されない体言化が、二つの場合のどちらに該当するかを明らかにする必要がある
  - 記述的問題 2: ネパール語以外の調査対象言語では、修飾用法しかみられていないが、ネパール語で報告されているように名詞句用法と修飾用法で表されうる文法関係が違うのではないか?
  - 理論的問題: NIA の体言化に対して何らかの一般化をすることは可能か?
- **本発表:** 言語内外に文脈を提示して体言化の容認性を調査した
  - 記述的結果 1: 従来非文とされていたものの一部は容認された。これは関係節化ができないとされてきたものには、非文法的なものと語用論的に不適切なものがあることを示す
  - 記述的結果 2: ネパール語も含め、二用法間で体言化の範囲の違いは認められないことを示す
  - 理論的主張: NIA の体言化に、アスペクトによって分裂する意味役割の階層を認められることを提案する。そして、そのような分裂的階層性は従来提案されてきた関係節化の階層では捉えられないが、メトニミーを基盤とする体言化理論によって説明できることを主張する

## 2. 調査方法

- 文法関係に注目する関係節の先行研究とは異なり、S, A, P, T, R という意味役割に該当する項の概念表示をする体言化を調査した
  - Keenan & Comrie (1977) などの先行研究は主語や直接目的語のような文法関係に着目する
  - しかし NIA の言語では形態統語的な能格性がみられることや、従来の記述では主語の関係節化として A を無視して S のみを見ていることがあることから、本発表ではより詳細な記述に基づいて各言語の体言化を比較するために S, A, P, T, R という意味役割に注目して調査した
- NIA の 4 言語の用言基盤項体言化の名詞句用法と修飾用法を、体言化内の空所以外の項を明示的に埋めて、具体的な談話コンテクストを与えた上で、どのように容認されるのかを調査した
  - 先行研究では空所以外の項が明示されていないことが容認性に影響している可能性がある
  - どのような場面での発話かを設定して体言化を含む文を提示した
  - また名詞句用法は修飾用法と対比的に提示した
    - P 体言化の例: 「[[私が買った]ペン]は赤いが、[[彼が買った]の]は青い」

## 3. 調査対象言語

- 本研究では、Subbārāo (2012) などの先行研究で挙げられている NIA から系統的・地理的に偏りがなないように選んだシンハラ語・ネパール語・ヒンディー・ウルドゥー語・ベンガル語を調査する
- NIA 内部の系統関係は以下のように分類される (Grierson 1903–1928; Masica 1993)

- Inner Indo-Aryan: ネパール語、ヒンディー・ウルドゥー語
- Outer Indo-Aryan: シンハラ語、ベンガル語
- 調査対象言語は地理的には図 1 のように分布している



図 1. 調査対象言語が話される主な地域 (© [OpenStreetMap](#) contributors)

- 多くの NIA 言語において用言基盤項体言化のストラテジーは相関構文と分詞の二つがある
  - 分詞は修飾される名詞の文法関係に関して言語内外で様々に制限があることが知られる (Subbārão 2012) ため、本稿では分詞と呼ばれてきた体言化に注目する
- 各言語のいわゆる分詞の体言化にみられる制限は表 1 にまとめられる
  - 表では各言語のそれぞれの用法について先行研究で述べられている制限をまとめている
  - OK は少なくとも一部について可能であること、NO は非文だと記述されてきたもの、空白は先行研究では明示的に述べられていないことを表す
  - 各言語の出典: シンハラ語 (Subbārão 2012; Chandralal 2010), ベンガル語 (Dasgupta 1980; Faquire 2014; Subbārão 2012), ネパール語 (Wallace 1985; Paudyal 2010), ヒンディー・ウルドゥー語 (McGregor 1986; Hook & Koul 2014; Kachru 1980; Subbārão 2012; 西岡 & Kumar 2021; Ahmed 2010)

表 1. 先行研究のまとめ

言語	用法	S	A	P	T	R
Sinhala (past, nonpast)	名詞句用法					
	修飾用法	OK	OK	OK	OK	OK
Bengali	名詞句用法					
	修飾用法	OK	OK	OK	OK	NO
Nepali (imperfect)	名詞句用法	OK	OK	NO	NO	
	修飾用法	OK	OK	OK	OK	OK
Nepali (perfect)	名詞句用法	OK	OK	OK	OK	
	修飾用法	OK	OK	OK	OK	OK
Hindi-Urdu (imperfect)	名詞句用法	OK				
	修飾用法	OK				
Hindi-Urdu (perfect)	名詞句用法	OK		OK	OK	
	修飾用法	OK	OK	OK	OK	NO

#### 4. 結果

- 調査結果は表 2、表 3 にまとめてある
  - OK は少なくとも一部について可能であること、NO は不可能であることを意味する
  - Early Nepali のデータは Wallace (1985) によるものである
  - 各表はテンス・アスペクトごとに、体言化が指しうる項の意味役割の含意的階層を示す
- Wallace (1985) に反して、修飾用法が可能な体言化は名詞句用法も可能であることがわかった
- また従来非文法的とされてきた体言化にも、談話文脈を設定するなど容認されるものがある
  - ヒンディー・ウルドゥー語未完了体言化は、先行研究の通り S のみが容認された
  - それに対して、ベンガル語の R やネパール語の P, T は先行研究に反して容認された

表 2. 調査結果: 未完了・非過去の体言化における含意的階層性

言語	S	A	P	T	R
Hindi-Urdu	OK	NO	NO	NO	NO
Early Nepali	OK	OK	NO	NO	NO
Nepali	OK	OK	OK	OK	OK
Bengali	OK	OK	OK	OK	OK
Sinhala	OK	OK	OK	OK	OK

表 3. 調査結果: 完了・過去の体言化における含意的階層性

言語	P	T	S	A	R
Early Nepali	OK	OK	OK	NO	NO
Hindi-Urdu	OK	OK	OK	OK	NO
Nepali	OK	OK	OK	OK	OK
Bengali	OK	OK	OK	OK	OK
Sinhala	OK	OK	OK	OK	OK

- 未完了・非過去の体言化:<sup>1</sup>

(1) S 体言化 (ヒンディー・ウルドゥー語未完了体言化) (McGregor 1986: 156)

[*cəl-t-ī* (hu-ī)] *gaṛī=se kūd pəṛ-na bevəqūfī he.*  
 move-NMLZR-F be-NMLZR.F train=from jump fall-INF stupidity be.3.PRS  
 ‘To jump from a moving train is stupid.’

(2) A 体言化 (ヒンディー・ウルドゥー語未完了体言化は非文)

\*[*khiṛkī toṛ-t-a* (hu-a)] *admī pagəl he kya?*  
 window break-NMLZR-M.SG be-NMLZR.M.SG man crazy be.3.PRS Q  
 ‘Is the man who is breaking the window crazy?’

(3) S 体言化 (18 世紀のネパール語未完了体言化) (Wallace 1985: 108)

*gha va-nya dekhi [kirat-baṭa bhagi-ja-nya]-kaṇa paḷar-era*  
 union make-NMLZR after Kirat-from flee-go-NMLZR-ACC capture-CVB  
*hami-lai saūpi di-nya cha.*  
 1PL-DAT ally give-NMLZR be.PRS.3

‘After the alliance is made, our ally will give us those who fled from Kirat whom he captured.’

<sup>1</sup>本稿で用いる略号は Leipzig Glossing Rules に従う。それ以外の略号は以下の通り: NMLZR = nominalizer

(4) A 体言化 (19 世紀のネパール語未完了体言化) (Wallace 1985: 108)

[ <i>cita-yako</i>	<i>kamaṅna</i>	<i>pur̥yau-nya</i> ]	<i>ajṷa</i>	<i>daṷibṷa</i>	<i>cha</i>	<i>ar̥ko</i>	<i>chaṷinaṷa</i> .
think-NMLZR	desire	fulfill-NMLZR	today	fate	be.PRS	other	be.NEG

‘That which fulfills our desires is fate and nothing else.’

○ ネパール語 P, T 未完了体言化の名詞句用法は Wallace (1985) では非文とされてきたが可能

(5) P 体言化 (現代ネパール語未完了体言化)

[ <i>brazil-le</i>	<i>dherai</i>	<i>jit-ne</i> ]	<i>khel</i>	<i>fuṭbol</i>	<i>ho</i>
Brazil-ERG	much	win-NMLZR game		football	be.PRS.3
<i>taṷa</i>	[ <i>as̥t̥reliya-le</i>	<i>jit-ne</i> ]		<i>kriket̥</i>	<i>ho</i> .
but	Australia-ERG	win-NMLZR		cricket	be.PRS.3

‘The game which Brazil wins is football, but the one which Australia wins is cricket.’

cf. [*jit-ne*]=*haru baliya thie* は P 体言化と解釈できないとされていた (Wallace 1985)

(6) T 体言化 (現代ネパール語未完了体言化)

[ <i>mai-le</i>	<i>us=lai</i>	<i>di-ne</i> ]	<i>kura=haru tyo</i>	<i>koṭha=ma thie</i>	
1SG-ERG	3SG=DAT	give-NMLZR	thing=PL that	room=in be.PST.3	
<i>ra</i>	[ <i>mai-le</i>	<i>taṷaṷ=lai</i>	<i>di-ne</i> ]= <i>haru</i>	<i>yo</i>	<i>koṭha=ma thie</i> .
and	1SG-ERG	2SG=DAT	give-NMLZR=PL	this	room=in be.PST.3

‘The things which I will give to her were in that room, and the ones which I will give to you were in this room.’

cf. [*di-ne*]=*haru yo koṭha=ma thie* は T 体言化と解釈できないとされていた (Wallace 1985)

○ ベンガル語 R 体言化の修飾用法は Faquire (2014) では非文とされたが可能

(7) R 体言化 (ベンガル語体言化)

[ <i>mohila-r</i>	<i>khelna</i>	<i>de-wa</i> ]	<i>bacca=ṭi</i>	<i>aṷol-e</i>	<i>amar</i>	<i>bhai</i>
lady-GEN	toy	give-NMLZR	child=CLF	actual-LOC	1SG.GEN	brother
[ <i>ṭobe</i>	<i>mohila-r</i>	<i>miṭṭi</i>	<i>de-wa</i> ]= <i>ṭi-ke</i>	<i>ami</i>	<i>cin-i</i>	<i>na</i> .
but	lady-GEN	sweet	give-NMLZR=CLF-DAT	1SG.NOM	know-1	NEG

‘The child to whom the lady gave a toy is actually my brother, but I do not know the one to whom the woman gave a sweet.’

cf. R 体言化修飾用法 [*amar ciṭhi dewa*] *lok=ṭi* は非文とされていた (Faquire 2014)

○ ベンガル語・現代ネパール語・シンハラ語では、S, A, P, T, R 体言化全ての二用法が可能

● 完了・過去体言化:

(8) P 体言化 (18 世紀のネパール語) (Wallace 1985: 109)

[ <i>bhaṅ-yako</i> ]	<i>sunyāṷ.</i>
say-NMLZR	hear.PST.1PL

‘We heard what was said.’

(9) T 体言化 (19 世紀のネパール語) (Wallace 1985: 109)

<i>taṷar̥tha</i>	<i>taha</i>	[ <i>ma-kane</i>	<i>praṷkaṷa</i>	<i>gar-yako</i> ]	<i>timi-le</i>	<i>na-jan-yako</i>	<i>ho</i> .
therefore	then	1SG-DAT	clear	do-NMLZR	2SG-ERG	NEG-know-NMLZR	be.PRS.3SG

‘Therefore, you do not understand that which has been made clear to me.’

(10) S 体言化 (19 世紀のネパール語) (Wallace 1985: 109)

[ <i>bāc-yak</i> ]- <i>i</i>	<i>mer-i</i>	<i>hunchṷa</i> .
survive-NMLZR-F	1SG.GEN-F	be.PRS.3SG

‘The one who survived is my wife.’

(11) A 体言化 (ヒンディー・ウルドゥー語完了体言化)

[ <i>pi-ya</i>	<i>hu-a</i> ]	( <i>admī</i> )	<i>caṷ</i>	<i>raḥ-a</i>	<i>he</i> .
drink-NMLZR.M.SG	be-NMLZR.M.SG	(man)	move	PROG-M.SG	be.PRS.3

‘The drunken (man) is walking.’

(12) R 体言化 (ヒンディー・ウルドゥー語完了体言化は非文)

*[ɔrat-k-a	khilna	di-ya	hu-a]	bacca	darasal
lady-GEN-M.SG	toy	give-NMLZR.M.SG	be-NMLZR.M.SG	child.M	actually
mer-a	bhai	he	par	[ɔrat-k-e	mithai
1SG.GEN-M.SG	brother	be.PRS.3SG	but	lady-GEN-M.OBL	sweet
di-e		hu-e]-ko	me	nahi	jan-t-a.
give-NMLZR.M.OBL		be-NMLZR.M.OBL-DAT	1.SG.NOM	NEG	know-NMLZR-M.SG

‘The child to whom the lady gave a toy is actually my brother, but I do not know the one to whom the woman gave a sweet.’

- ベンガル語・現代ネパール語・シンハラ語では、S, A, P, T, R 体言化全ての二用法が可能

## 5. 議論

### 5.1. 概念表示と指示

- 先行研究で非文であるとされてきた体言化の一部は、本研究の調査では容認された
  - 本研究では、名詞句用法と修飾用法を対比するなどの談話コンテキストを設定し、体言化内の空所 (gap) 以外の項も埋めて調査をした
  - この調査によって、非文とされてきた体言化の中にも容認されるものがあると分かった
- 先行研究の議論は、当該の体言化が概念表示を持つかどうかという問題と、指示をする際に具体的な談話コンテキストがどれほど必要とされるかという問題を一つにしている
  - 概念表示を持つか否かは、体言化が統語的に成立しているかどうかという統語論的問題
  - 指示がしやすいか否かは、談話コンテキストによって概念表示に対応する実世界の事物を決定できるかどうかという語用論的問題
  - 先行研究は容認性が示すことが語用論的な不適性である場合にも、統語的に非文であると解釈
- 従来 NIA の関係節化の制限とされてきたものには、語用論的と統語論的なものの両者がある

### 5.2. 名詞句用法と修飾用法

- 今回調査した体言化は一貫して名詞句用法と修飾用法で使えることが体系的に明らかになった
  - 先行研究ではネパール語の P, T 体言化名詞句用法が非文とされていて、他の言語については名詞句用法に関してほとんど記述がなかった
  - 今回、S から T 体言化の名詞句用法と修飾用法を 4 言語に関して網羅的に調査して記述した
  - 調査した 4 言語の体言化では、修飾用法ができるが名詞句用法はできないものはなかった
- この結果は、体言化という一つの構造が二つの用法を持つという体言化理論の主張を支持する

### 5.3. インド・アリア諸語の体言化（関係節）における文法関係・意味役割の階層

- 4 節の表 2、表 3 で示したデータには、アスペクトごとに異なる含意的階層性が認められる
  - 完了体言化では、「終点中心的階層: {P, T, S} > {A} > {R}」という含意的階層性
  - 未完了体言化では、「始点中心的階層: {S} > {A} > {P, T, R}」という含意的階層性
- この NIA に見られる含意的階層性は、従来の関係節化における文法関係の階層では捉えられない
  - 関係節の類型論においては、Keenan & Comrie (1977) や Fox (1987) が階層を提案してきた
    - 前者は主語 (S, A) を最上位とする階層、後者は絶対格 (S, P) を最上位とする階層を提案
  - こうした従来提案されてきた含意的階層性は以下の理由から、NIA の体言化には適用できない
    - まず、NIA 内部においてさえも一つの階層を当てはめることはできない

- 次に上記二つの研究が提示する主語 (S, A) および絶対格 (S, P) を階層上に設定できない
- それに対して体言化理論では、視点 (viewpoint) (DeLancey 1981, 1982) の概念を導入することで、言語に遍在的現象であるメタファー・メトニミーによって二つの含意的階層性を統一的に説明できる
  - DeLancey (1982) は空間・時間・他動性にそれぞれ Source → Goal, Onset → Termination, Agent → Patient の方向性があるとし、事象は外的視点からだけでなく始点または終点に視点があるものとして述べることができるとされる
    - 例: *go* で述べられる事象は空間的始点に視点、*come* で述べられる事象は空間的終点に視点
    - localist metaphor (Croft 2001): 三つの方向性間には空間的方向性に基づくメタファー的関係
  - DeLancey (1982) では、完了事象は時間的な終点 (Termination) に視点を持つと解釈されている
  - 本稿では localist metaphor (Croft 2001) により、時間的な終点に視点を持つ事象が、他動性の終点 (Patient) に視点を持つ事象を両者の類似性からメタファー的に喚起すると考える
  - こうして喚起された他動性の終点に視点を持つ事象は、隣接概念である他動性の終点つまり被動者を THE EVENT FOR THE PROTAGONISTS というメトニミーによって喚起すると考えられる
  - このような仕組みによって完了事象は P や 被動者的 S を喚起しやすいため、体言化の基盤にはメトニミーがあると考えれば、完了体言化に終点中心的階層がみられることが説明できる
  - 未完了体言化でも同様に考えれば、他動性の始点である行為者、すなわち S や A をメトニミーで喚起しやすいと考えられ、未完了体言化に始点中心的階層がみられることが説明できる
  - よって体言化がメトニミー基盤の文法現象と考えると、二つの階層性を統一的に説明できる

## 6. まとめ

- 本研究は、NIA に属する 4 言語の体言化を体言化理論の観点から体系的に記述した
- 記述をもとに二つの含意的階層性を提案し、それが体言化理論では統一的に説明できると主張した

## 参考文献

- Ahmed, Tafseer. 2010. The unaccusativity/unergativity distinction in Urdu. *Journal of South Asian Linguistics* 3(1). 3–22. / Chandralal, Dileep. 2010. *Sinhala*. Amsterdam: John Benjamins. / Croft, William. 2001. *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford University Press. / Dasgupta, Probal. 1980. *Questions and relative and complement clauses in a Bangla grammar*. New York: New York University dissertation. / DeLancey, Scott. 1981. An interpretation of split ergativity and related patterns. *Language* 57(3). 626–657. / DeLancey, Scott. 1982. Aspect, transitivity and viewpoint. In Paul J. Hopper (ed.), *Tense-aspect: Between semantics and pragmatics*, 167–183. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. / Faquire, Razaul Karim. 2014. Revisiting relative clauses in Japanese, with reference to Bangla. *NINJAL Research Papers* 8. 15–31. / Fox, Barbara A. 1987. The noun phrase accessibility hierarchy reinterpreted: Subject primacy or the absolutive hypothesis? *Language* 63(4). 856–870. / Grierson, George A. 1903–1928. *Linguistic Survey of India*. Delhi: Motilal Banarsidass. / Hook, Peter & Okmar N. Koul. 2014. The noun phrase accessibility hierarchy and participial noun-modifying constructions in Hindi-Urdu and Kashmiri. 11th International Conference of South Asian Languages and Literatures (ICOSAL-11). / Kachru, Yamuna. 1980. *Aspects of Hindi grammar*. New Delhi: Manohar. / Kachru, Yamuna. 2006. *Hindi*. Amsterdam: John Benjamins. / Keenan, Edward L. & Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 8(1). 63–99. / Masica, Colin P. 1991. *The Indo-Aryan languages*. Cambridge: Cambridge University Press. / McGregor, Ronald Stuart. 1986. *Outline of Hindi grammar: With exercises. Reprinted*. New York: Oxford University Press. / Paudyal, Netra. 2010. The syntax of three-argument verbs in Nepali. A qualifying paper submitted to Max Planck Institute Leipzig. / Shibatani, Masayoshi. 2019. What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization. In Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani & David W. Fleck (eds.), *Nominalization in Languages of the Americas*, 15–167. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. / Shibatani, Masayoshi. 2021. Syntactic typology. In *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*. / Subbārāo, Kārumūri V. 2012. *South Asian languages: A syntactic typology*. Cambridge: Cambridge University Press. / Wallace, William David. 1985. *Subjects and subjecthood in Nepali: An analysis of Nepali clause structure and its challenges to relational grammar and government & binding*. Urbana, IL: University of Illinois at Urbana-Champaign dissertation. / 西岡美樹, Rajesh Kumar (2021) 「ヒンディー語の名詞修飾構造と機能について」鄭聖汝, 柴谷方良 (編)『体言化理論と言語分析』 59–151. 大阪大学出版会 / プラシヤント・バルデシ, 柴谷方良 (2020) 「マラーティー語の名詞修飾表現—体言化理論の観点から—」プラシヤント・バルデシ, 堀江薫 (編), 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 413–445. ひつじ書房